

僕は何年も前から分析を受けています。しかしながらこの分析はまったくルーチンと化していません。僕はいまなお驚かされているのです—そのサプライズは良いものであったり悪いものだったりしますが、そして真理を知りたいという探求心を生みだし続けています。

昨年は、あるひとつのエピソードがとりわけ印象的でした。僕はまぶたがはれ上がるという、目の周りの症状をもちました。僕はそのため数日間、いわば目の見えない人になりました。眼科の医者たちは、診断を様々につけました。なんらかの疾患、アレルギーと言われ、最初はこの薬、次はまた別の薬といったふうに処方されました。毎回医者はこれですと診断を下し、でも結局それではないと分かるのでした。医学的な機械による治療は失敗におわりました。なにかがそこで抵抗していたのです。

僕の病気の一覧表に確かに存在していたアレルギー領域が本当に後退したのは、僕がそれを分析をして、解釈をしたときでした。言い換えると、僕はそれらを言葉にしてみたのです。自分の身に起きたことにたいしてもっとも適切で、もっとも本場で、もっとも近い言葉を探したのです。

見る (regarder) という語の接合が繰り返しそこには存在していました。Vois-la (Voilà)。じつはこの語が現していたのは、「覆い voile」と「そこで là」でした。そこでは僕の幻想が、自分の知らないうちに作用していました。ひとはなにも言わないためにしゃべることがあります。それとおなじように、僕は自分にかかわりあいのある、ある特定のいくつかの点において、なにも見ない (regarder) ために、見ていたのです (voir)。

僕は一時的に目の見えない人になったのですが、それは僕がどれほど幻想によって盲目的になっているかを理解するためでした。僕はそれを分析家がいる場で、理解したのです。そのおかげで僕は重要な変化を遂げることができました。僕はもう、かつてのようには自分を見なくなりました。以前引き受けなかったものを、今、僕ははっきりと見ています je vois là。